



Title	ドゥルーズにおける構造主義再考
Author(s)	小林, 卓也
Citation	年報人間科学. 2008, 29-1, p. 21-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8892
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドゥルーズにおける構造主義再考

小林 卓也

〈要旨〉

一九六八年に出版されたドゥルーズの『差異と反復』は、彼自身が述べているように、その時代に固有の雰囲気の中で執筆された。とりわけ、ソシュールの言語学モデルを下地とした人文科学における構造主義が、『差異と反復』の主題と同様、差異という概念をめぐって展開されていることは明らかである。しかし、構造主義に対するドゥルーズ自身の再三の言及にも関わらず、構造主義とドゥルーズとの関係は、けっして明瞭ではない。したがって、まず、本稿では、ドゥルーズがどのように構造主義を理解していたのかを確認するために、彼の「何を構造主義として認めるか」という論文を分析する。そこにおいてドゥルーズは、静態的な構造の深部に、構造それ自体の発生原理である記号界の運動性を見出す。この記号の運動性を構造主義の一般的基準とすることで、ドゥルーズは、構造主義の言語学モデルを棄却し、一般的な構造主義理解そのものの変更を要請する。そして、この構造主義理解が、『差異と反復』における理念概念へと、どのように読み替えられているのかを考察することが、本稿の目的である。

ドゥルーズの構造主義理解を再考することで、われわれは、経験的領域に必然的に内属した超越論的条件を、発生と構造の相補的關係において思考すること、すなわち、『差異と反復』の主題である超越論的经验論の一端を明らかにすることができるだろう。

キーワード

ジル・ドゥルーズ 構造主義 記号 発生

超越論的经验論

一九六八年フランスにおいて、G・ドゥルーズの国家博士論文『差異と反復』は出版された。この著作は、概念の同一性を要求する類概念と種概念の批判を通して構築される個体化の議論、現実的な個体化の過程を理念的多様体と強度的多様体によって構成するシステム論、そしてこれらの思考を可能にするために要求されるあらゆる超越論的哲学の構築を主題とする(鈴木二〇〇三年:一三六頁―一三七頁)。『差異と反復』におけるあらゆる場面で、これらの主題が、差異と反復という概念の交錯において変奏され、展開される。

ドゥルーズの思索の展開を年代順に概観すると、一九五三年から『差異と反復』が出版される一九六八年にかけての彼の思索が、差異という概念に向けられていたことが分かる。すなわち、差異をどのように見出し、いかにしてそれに存在論的な価値を与えるかという問いをめぐって、当時のドゥルーズの思索は展開されている。鈴木泉氏によると、J・イポリットの『論理と実存』の書評という、ごく初期の時点においてすでに、存在論に結びついた差異の概念という着想が見いだされる(二〇〇三年:一三七頁)。この観点からすると、一九五六年の二編のベルクソン論は、差異概念を存在論的かつ方法的に洗練している点で重要である。

ではなぜドゥルーズは差異という概念を志向したのか。この問いは、当然立てられるべき問いでありながら、正面からそれに取り組むことは非常に難しい。ただ、明白なことは、ドゥルーズ自身が指摘しているように、差異という概念をめぐる思考が、当時の時代状況における一般的雰囲気であったということだ。すなわちそれは、

ハイデガーの「存在論的差異の哲学」、精神分析的無意識、現代小説の技法、そして「共存する空間における差異的な特徴の分配に基づけられた、構造主義の実践」(DR1)^①にはかならない。とくに、構造主義は、言語体系を差異の体系として規定し、それを言語学の対象としたソシュールの思想を基盤としている点で、顕著に時代の雰囲気我代表するものであるといえる。この意味で『差異と反復』は、ある程度、執筆当時の思想的動向と軌を一にしていると考えられる。

しかし、S・ジジックが述べるように、「実際、一般的に「構造主義」の領域として見なされている領域とドゥルーズとの関係は、見かけ以上により不明瞭である」(2004:82)。なぜなら、『差異と反復』および『意味の論理学』において、肯定的かつ明示的に言及されていた構造主義は、精神分析家F・ガタリとの共著において、一九七〇年代以降、あからさまに批判されることになるからである^②。

さらに、哲学だけでなく、あらゆる社会科学や政治的活動を巻き込んだ、当時の構造主義そのものを定義することの困難さが、ドゥルーズと構造主義との関係をより不鮮明にしている。精神分析や人類学をはじめとする、あらゆる人文科学において展開された方法論を、はたしてどのように一般化すればよいのか。

そこで、なによりもまず第一に、ドゥルーズ自身の構造主義理解を明確にし、それを、彼の理論体系のなかで位置づける必要があるとわれわれは考える。とくに、構造主義を時代の雰囲気として共有

していた、ガタリとの共著以前の主著である『差異と反復』と構造主義の関係を明らかにしておくことは、その後のドゥルーズの思考の展開を測定するためにも必要な作業である。

したがって、本稿ではまず、ドゥルーズ自身の構造主義理解が端的に示された、「何を構造主義として認めるか」³⁾という論文の記述にしたがって概念の分節化を行う。そして、構造主義という時代の雰囲気なかで、ドゥルーズが共有していたものが、どのように『差異と反復』へと連結されているのかを考察することがわれわれの目的である。

一 構造主義における言語学モデル

「何を構造主義として認めるか」において、構造主義者として挙げられているのは、言語学者のR・ヤコブソン、人類学者C・レヴィ＝ストロース、精神分析家J・ラカン、「認識論を刷新する哲学者」(AS238)M・フーコー、マルクス主義哲学者L・アルチュセール、文芸批評家R・バルト、そしてテル・ケル派である。ドゥルーズはまず、これら構造主義に共通の了解事項とはいったい何かという問いを提起する。そこでドゥルーズが着目するのは、構造主義における言語学モデルの特権性である。一般的に、構造主義の理論的源泉は、F・ソシュールによって刷新された言語学や、それを継承し、音韻論を発展させたR・ヤコブソンに帰せられる。とくに、科学としての言語学を確立するために、その理論対象をラングの形式的体

系性に絞ったソシュールの方法論は、構造主義の客観的妥当性に、ある程度の根拠を与えていると考えられる⁴⁾。この意味で、「構造主義の起源を、言語学にもとめる理由がある」(AS239)。しかし、もし構造主義が、他の領域への言語学的方法の、単なる適用であるならば、その適用可能性はいったい何によって保証されるのか。

そもそも構造主義は、言語学を単に適用しているのではない、というのがドゥルーズの回答である。そうではなく、「実のところ、言語活動 [langage] であるものにおいてのみ、構造は存在する」(AS239)とドゥルーズは主張する。すなわち、ドゥルーズは、構造主義の基準を言語学的方法ではなく、言語活動という水準でとらえようとしている。

しかし、このように構造主義を言語活動の水準でとらえることは、その科学性を支えていた言語学モデルの特権性を疑問に付すことになる。というのも、ここで言われている言語活動には、「秘教的な言語活動」、「非言語的 [non verbal] な言語活動」、さらには「沈黙の言述」(AS239)といったものまでもが含まれるからだ。これらは、音声的発話なり物理的事実によって、言表可能な文ないしは命題を扱う、一般的な言語学の対象からは排除される。つまり、ドゥルーズは、一般的な言語学の対象とはならない、非言語的なものを含んだ言語活動と、構造との結びつきに注目することで、言表可能な対象しか扱えない言語学モデル自体の限界を示している。

このように、言語学モデルから言語活動へと、議論の水準を移すことがどのような帰結をもたらすのかについては、後述しなければ

ならない。いずれにせよ、こうして、「何を構造主義として認めるか」という問いは、「どのようにして彼ら構造主義者たちは、各々の領域において固有の言語活動を認めるのか」という問いへと転化される。したがって、この非言語的なものを含んだ言語活動が何であり、それがいかにして構造主義を定義するのかを明らかにしなければならぬ。そのために、まずはドゥルーズが提示する構造主義の一般的基準を確認しておこう。

二 第一の基準としての記号界

構造主義の基準として、まず、ドゥルーズが提示するのは、記号界 [le symbolique]⁵⁾ という基準である。いうまでもなくこの基準は、フランスの精神分析家であるJ・ラカンの、現実界、想像界、象徴界(＝記号界)を出自としている。ドゥルーズによれば、構造主義以前の思考様式は、根源的に真なる現実界と、想像的なイメージや概念とのあいだの対立において機能していたとされる。「フロイト主義でさえも、二つの原理の観点から解釈されている。すなわち、失望させる力をもつ現実原理と、幻覚的に満足させる力をもつ快楽原理である」(AS240)。

それに対して構造主義は、記号界が、現実界や想像界と混同されるのを拒絶し、記号界に独自の領域性を確保する限りにおいて、従来の思考様式とは根本的に異なる。たとえば、藤田博史氏によると、精神分析の対象は「意味の紡ぎ出されるその過程」であり、「その

ためには表現そのものを意味からいねいに剥ぎ取ること」が目指されるべき姿勢となる。「フロイトのいう圧縮と移動、つまり隠喩と換喩」、「シニフィアンによって構成される構造という平面」(藤田一九九〇年二二四頁)はそのために要請される。

では、この記号界はどのような内的構成をしているのか。ここでドゥルーズが持ち出すのが、音韻論における音素の理論的地位である。ドゥルーズの議論を例に取ると、billard (玉突き台) と pillard (略奪者) を区別する最小の単位は、/b/ と /p/ という音素である。この b と p が、異なる二つの単語、billard と pillard の弁別的特性としての /b/ と /p/ という音素であるためには、任意の言語体系において b と p が隣接関係に置かれ、それらの有声と無声という特性を同定する必要がある(カラー二〇〇二年六十九頁)。つまり、「音素が入り込む関係、音素が相互に決定される関係、こうした関係から独立して音素が実在するわけではない」(AS246)。音素と同様、記号界における記号要素は、その各々の記号間関係においてのみ確定される。

さらに、この記号要素間の関係として、ドゥルーズは、 α や β といった微分方程式における記号を事例として挙げている。ドゥルーズにおける数学的比喩の意義については本稿では立ち入らないが、単純に考えて、音素や数学的記号それ自体は、いかなる意味内容も、いかなる外的な指示対象も持っていない。すなわち、この α と β という記号は、「何か無限に小さい量を指し示すのではないし、何か幾何学的形質や運動学的規定や力学的力を指し示すのではない。そ

うではなくて、それらを発生させ維持する理念的で潜在的な世界を指し示すのである」(小泉 一九九九年 a:二六五頁)。このような記号は、一定の関係におかれることで弁別特性として機能する以外に価値をもたない。記号は常に他の記号にのみ差し向けられ、自らを規定する記号の活動領域と、そこにおける記号自身の運動性(方向、位置、場所)のみを表現しているのである。

このような記号的要素とそれを規定している形式的関係が、構造の特異性を規定している。それによって、ある言語構造が他の言語構造から区別可能となるように、構造間の差異が作り出される。これが、構造主義における記号界の特性である。

ところでドゥルーズは、「われわれは少なくとも、対応する構造 [la structure correspondante] は、感覚可能な形態とも、想像の文彩とも、叡知的な本質ともいかなる関係ももっていないと言いうことができる」(AS242)と述べている。ここで注目すべきは、普遍的な真理概念が棄却されている^⑤と同時に、「対応する構造」という表現によって、ドゥルーズが記号界と構造の区別を示唆していることである。ドゥルーズはさらに記号界と構造との関係を次のように述べる。「ルイ・アルチュセールは、この上なく適切に、構造の地位を「理論」そのものと同一とした。そして、記号界は、独創的で特有の理論対象を生産するものと解されるべきである」(AS242)。すなわち記号界は、構造主義の理論対象である構造の発生原理として規定されている。したがって、記号界と構造は、互いに論理階層を異にすると考えられる。記号界と構造は厳密に区別されなければならない。

らない。では記号界と構造の分節点はどこに見出されるべきであろうか。まずは、記号界から区別される限りにおいての構造とはなにかを明確にしておこう。

三 構造とはなにか

ドゥルーズは、構造概念をその全体的構造と部分的な下部構造の二層に区分している。すなわち、構造内部の諸要素とその諸要素間の関係によって「全体として完全かつ完備に確定されている」(AS251)全体的構造と、その全体的構造の「特定の関係、特定の関係の値、特定の特異点の分配」が「今ここで [ici et maintenant] 現実化している」(AS251)部分に対応する下部構造である。ドゥルーズはここで再び言語学を事例に挙げる。「すべての可能な音素や可能な音素関係を受肉する全体的言語 [langue] などは存在しない。そうではなくて、言語活動 [langage] の潜在的な全体性が、排他的方向にしたがってさまざまな言語 [langues] に現実化し、その各々の言語は、特定の関係、特定の関係の価値、特定の特異性を受肉する」(AS251)。したがって、「われわれは潜在的な共存の総体としての、ある領域の全体的な構造と、この領域におけるさまざまな現実化に対応するもろもろの下部構造を区別しなければならない」(AS251)。そしてドゥルーズは、共存する全体的構造の存在様態を潜在的 [virtuel]、そして、その一部分的構造が現実的な形態のなかに発生することを現実化 [actualisation]、あるいは分化 [différenciation]

と形容する。この潜在性という概念は、ドゥルーズの哲学においてきわめて重要な位置を占めており、本稿でその詳細を論じ尽くすことはできない。ここではさしあたり、潜在的と現実化という対比によって、ひとつの領域における二つの異なる構造間の区別が特徴付けられていることを指摘しておく。

そしてドゥルーズは、この二つの構造間の特性の差異を次のように述べている。「潜在性としての構造について、われわれが述べるべきことは、それが依然として分化されていない [indifférencié] にもかかわらず、まったく、完全に差異化 (微分化) されている [différencié] と「うごかう」である」(AS251)。ここではいかなる現実的な特性も持たないが、それ自体において「いかなる混同も、いかなる未規定性も含んでいない共存」(AS250) という全体的構造の形態が示されている。それに対して、局所的な現実化に対応する下部構造について、ドゥルーズは次のように述べる。「しかしかの (現在あるいは過去の) 現実的な形態の中で自らを受肉するもろもろの構造について、われわれが述べるべきことは、それらが自らを分化し、自らのために自身を現実化すること、それは厳密には自らを分化する [se différencier] ことだということである」(AS251)。明らかに、全体的構造と下部構造の差異は、分化あるいは現実化という観点におかれている。

ここから二重の側面を内包した構造概念が浮き彫りとなる。「構造はこの二重のアスペクト、あるいは、差異化—分化 [différenciation] という名の下で示すことのできるこのコンプレクスから切り離しえ

ない。そこでは *l'éc* が普遍的に規定された音素的関係を構成する」(AS251)。*éc* は、言語学的な弁別的特性ではない。それは、潜在性として十全に差異化された全体的構造と、現実に対応する下部構造との不連続かつ必然的な相関関係を示している。したがって、「ある領域から構造を引き出すことは、当の領域の存在者、対象、作品に先んじて実在する共存の潜在性を確定することである」(AS250) とドゥルーズは主張する⁽⁷⁾。

四 記号界と構造を分節化する「意味」の次元

構造主義の第一の基準としての記号界。それを発生の原理とし、全体的構造と下部構造によって構成される二重の構造概念。このように概念を分節化すると、むしろ、全体的構造と記号界との区別の不分明性が浮き彫りになるように思われる。なぜなら、それらはどちらも、現実的なものにも、想像的なものにも還元されえない、固有の領域を形成しているからである。言語学を例に取れば、音素とは、ある言語において現れうる他のもろもろの音素との連辞的ないし範列的關係によってのみ規定される存在者であり、けっして物理的な音連鎖や、言語使用者の心的要素に還元されるものではない (マルティネ 一九八〇年)。すなわち、音素は記号界の記号要素としても、全体的構造の要素としても解釈可能なのである。

しかし、記号界が発生の原理であるならば、構造とはそこから生産されるべき結果であり、互いに論理的階層を異にする両者を混同

することは避けなければならない。そして、ドゥルーズは、記号界と構造概念とのあいだに、ある概念を導入することで、両者の混同を回避する。すなわち、「意味[sens]」と「非意味[non-sens]」という概念である。

まず、ドゥルーズが用いる「意味」^⑧という概念の独自性を確認しておこう。そのうえで示唆的なのが、レヴィ・ストロースが、「マルセル・モースの業績解題」で述べた、意味の領域と認識の領域の区分であると思われる。レヴィ・ストロースは、「何ものも意味をもたなかった段階から、すべてのものが意味を所有した段階への移行が成った」(レヴィ・ストロース 一九七四年二四五頁)と述べる。そして、この意味の次元は、漸近的にしか遂行されえないわれわれの認識の次元とは根本的に異なる。「〈全宇宙〉が一举に意味作用をなすようになった瞬間に、だからといってそれがよりよく認識されたわけではないのだ」(レヴィ・ストロース 一九七四年二四五頁―二四六頁)。意味作用をなす全宇宙への根本的变化は、いかなるものも意味をもちえなかった段階から、言語活動というあらゆるものが意味をもつ次元への非連続的な変化を示している。「言語が動物的生活の段階で出現したとき、その契機や状況がどうだったにせよ、言語 [langage] は一挙にしか生れえなかった」(レヴィ・ストロース 一九七四年二四五頁)。

言語活動の領域が意味の次元であるならば、それ以前の段階は相対的に無意味、あるいは非意味 [non-sens] だということができる。非意味とは非存在を意味しない。むしろ、「深いところに、意味そ

れ自体がそこから結果として生じる、意味の非意味が存在するのだ」(AS244.245)。すなわち、それこそ、発生の原理としての記号界にほかならない。

さらに、一挙に生じた全体的構造としての言語活動の次元は、同時に、局所的な現実に対応する下部構造を含んでいるがゆえに、そこから未知という認識論的な乖離が帰結する。しかし、ドゥルーズないしレヴィ・ストロースが用いる「意味」と非意味との境界線は、こうした認識論的水準に引かれるべきではない。なぜなら、われわれがある段階において完全に認識しえない意味作用の全体でさえ、権利上、可能的には了解可能な次元にほかならないからだ。

したがって、構造主義がその理論的対象とする構造とは、すべからず意味の次元であり、「構造主義にとって、いつでも過剰に意味があるし、意味の過剰生産、意味の過剰決定がある」(AS245)ということになる。そして、意味という観点こそが、構造の発生の原理であり、かつ、構造がすべからず意味の次元である限りにおいて、非意味として定義される記号界と構造との分節化を可能にする。

さらに、言語活動はつねに非言語的な要素を含んでいる。このような観点からすれば、互いに不分明であった、言語活動の次元である全体的構造と、非言語的な記号界との関係性は、むしろ、発生の原理である記号界が、つねに構造に内在的であるという特性を示していることがわかる。したがって、記号界とは、それ自体意味を持たないがゆえに、意味の領域である言語活動、構造の領域とは区別されながらも、構造に内在するその発生の原理であると考えられる

のだ。

では、記号界はいかにしてこのような言語活動の領域を発生させ、現実的な組織あるいは部分、種や事物の間の関係性に受肉するのだろうか。

五 言語活動はいかに発生するのか

ドゥルーズは上述した記号界の形式的規定性だけでは、構造は機能しないという。構造が機能する、すなわち、現実存在の生産のために導入されるのが、セリー化とパラドクスの対象という概念である。そしてドゥルーズは、一九六九年に発表された『意味の論理学』⁹⁾の前半部分において、これら構造主義の一般的基準が、いかにして言語活動あるいは意味の領域を発生させるのかということを検討している。この議論を参考に、いかにして記号界が言語活動の発生の原理となりうるのかを考えてみよう。

われわれが日常的に用いる言語活動には、さまざまな二元性が示されている。言葉と物、文と命題、命題と事物の状態。しかし、これらの二元性はすべて、言語の表現する部分である音響イメージとしてのシニフィアンと、それに対応する概念としてのシニフィエの二元性に還元されるとドゥルーズは考える(小泉二〇〇〇年:二一九頁―二二二頁)。では、この二元性はいかにして生成するのか。もっと正確に言えば、どちらも心的な過程、形相にはかならない、シニフィアンとシニフィエは何によって分節化されるのだろうか。

例えば、命題の意味とは何かという問いがある。命題の意味は、命題によって表現されるものであるにもかかわらず、命題の指示作用、表出作用、意味作用のいずれにも位置づけることができないとドゥルーズは考える。つまり、なんらかの命題 P₁ があるとき、その命題の意味 M₁ は、別の命題 P₂ によって指示されなければならない。さらに、命題 P₂ の意味 M₂ は、別の命題 P₃ によって指示されなければならない。これが無限に続くことになる。したがってここには、命題と意味をめぐる「退行のパラドクス、もしくは無限定な増殖のパラドクス」(LS41)がある。この場合、ある命題の「意味は、それを表現する命題の外側では存在しない」(LS3) にもかかわらず、その命題の意味を述べるためには、別の命題によって指示しなければならない。すなわち、そこにはどこまでも単なる命題の連鎖があるに過ぎない。このように、命題のいかなる次元にも還元できないなにかあるもの [aliquid]、それが命題の第四の次元としての意味 [sens] である (LS30)。

ここで、命題から意味を引き出すときに、命題の意味を意図的に抽出し、固定してみる。ストア派の論理学は、こうして「否定にも肯定にも関わらない中立的な存在」としての意味を発見する (LS45)。命題の意味をその中立性において捉えるとき、われわれは、命題の連鎖とは質的に異なるもう一つの連鎖を見出す。すなわち、命題が表現する、命題の意味の連鎖である。命題と命題の意味という二つのセリーの間には、常に不均衡、一方的な過剰と不足の関係がある。すなわち、命題による指示の連鎖 P₁ → P₂ → P₃ → … → P_n と、命題の

意味の連鎖 $M1 \rightarrow M2 \rightarrow M3 \dots \rightarrow Mn$ において、命題 Pn の意味 Mn は、さらに別の命題 $P(n+1)$ によって指示されるので、常に命題の連鎖が意味の連鎖に対して過剰となる。

この不均衡性は、単なる命題の連鎖の中に、命題の意味という中立的かつパラドクスの存在を求めるところで打ち立てられる。「われわれは、外見上同質の形式のもとで二つのセリーを構成することができる」(LS1)。そして、「シニフィアンとは、それ自身が意味の何らかの局面を示すすべての記号のことであり、これに対してシニフィエとは、意味のこの局面に対する相関的なものの役割をするもの、つまり、この局面との相対的な二元性として規定されるものである」(LS1)。あらかじめ、表現としてのシニフィアンと、その表現内容であるシニフィエがあるのではない。これらは単に同質的な命題の連鎖のなかで、意味を同定するという行為によって派生的に規定される二つの側面のことである。このとき、意味という要素が二つの側面を分節化し、相互が同化するのを防いでいる。

しかし、今、われわれに対して与えられているのは、命題の連鎖と命題の意味の連鎖であって、意味それ自体は、この二つのセリーのいずれのなかにも決して現れることがない。このような意味そのものを指示するのが、ドゥルーズの言うパラドクスのな語（カバン語）、パラドクスの対象（対象 x ）であり、それは自らが占める場所をつねに欠くがゆえに、空白の升目と呼ばれる。そして、意味それ自体を指示するこのパラドクスの対象は、セリーを分節化しながら二つのセリーのあいだを循環し、それぞれに相対的な意味を

付与することを機能とする。しかし、意味それ自体を命題によって指示あるいは指定することはできない。ここに意味をめぐるパラドクスが見出される。

そして、フーコーが『言葉と物』で述べた国王の場所、レヴィー・ストロースのゼロ記号、ヤコブソンの音素ゼロなどは、このパラドクスの対象の事例として挙げられる。なぜなら、音素ゼロとは、「それ自体としてはいかなる微分的特徴も音声的価値ももたないが、それとの関係によってもろもろの音素が固有の微分的関係のなかに位置づけられる」(AS261) ことを機能とするからだ。

六 構造主義における言語学モデルの棄却

このように、単なる同質的なセリーを経巡るパラドクスの対象が、記号要素をセリー状に配列させ、二つのセリーを分節化することと、命題に意味を付与し、われわれの言語活動におけるあらゆる二元性を成立させている⁽¹⁰⁾。したがって、「それ自体はシニフィアンではない複数の要素の結合から、常に意味は由来する」のであり、「意味は常に帰結、結果である」(AS244) ということが理解される。すなわち、言語活動の次元、構造主義の理論的对象としての構造とは、すくなくとも記号的要素、セリー化、パラドクスの対象といった、それ自体は非言語的な発生の原理によって構成されていると考えられる。ドゥルーズは言語活動のなかに、このような深部における記号の運動性を見出し、それらを構造主義の一般的基準とするの

である。

ここから導かれる帰結は重大である。まず、これは構造主義における言語学的モデルの特権性の剥奪を意味する。構造主義は、言語学モデルを通して、あらゆる構造の発生の原理としての記号界を同時に見出しているのであって、言語学モデルはひとつの単なる事例に過ぎない。したがって、「言語学の構造でさえ、究極的な要素や究極的なシニフィアンとして通用することなどありえない、精確に言い直せば、言語学から借りられた方法を別の構造に類比的に適用するにとどまることなく、たとえ音声的ではないとしても、いつでもシニフィアン、記号要素、微分的関係を含んでいる真の言語活動を別の構造のために発見するならば、言語学の構造でさえ特権性をもたないのである」(AS265)。

このように理解された構造概念は、現象を説明する単なる認識論的な方法ではなく、つねに発生という項と不可分に結びつく。すなわち、構造主義とは、理論の対象としての構造と同時に、その発生の原理を見出す、一種の超越論的哲学であるとドゥルーズは考えているのだ。「構造主義はあらたな超越論的哲学から切り離せない」(AS244)。構造主義における言語学モデルの棄却は、構造主義をこのあらたな超越論的哲学へと高めるために要請されると考えられる。ドゥルーズは、言語学から派生した構造主義に対して、それが、これまでの思考様式によっては到達しえなかった記号界という固有の領域を見出し、それを言語活動ないし理論の対象としての構造の発生の原理とする限りにおいて、きわめて肯定的な姿勢を見せる。し

かし、構造主義が言語学モデルに依存している限り、発生の原理をその結果である経験的なカテゴリーによって規定するという悪循環に陥ることを批判する。そして、言語学や構造主義に対するこのような両義的な姿勢は、構造概念と発生とを結び付けるという観点とともに、『差異と反復』のなかに、そのまま持ち越されている。それを確認することで、ドゥルーズが『差異と反復』において志向する、あらたな超越論的哲学の一側面を明らかにしよう。

七 『差異と反復』における構造と発生の連結

では、これまで確認してきたドゥルーズの構造主義理解は、とくに『差異と反復』においてどのような位置づけられるのか。われわれは、構造主義という観点から『差異と反復』を眺めることで、『差異と反復』という書物そのものが向けられた方向性を示唆することができると考える。

『差異と反復』において構造主義的方法に関する言及は少ない。端的に述べると、われわれがこれまで概念の分節化を行ってきた構造主義の一般的基準は、『差異と反復』において、理念 [idée] 概念へと読み替えられる。言語学的理念を事例に採ろう。

まず、ソシュールが提示した言語体系は、言語生成の充足理由、言語的活動の超越論的条件としての十全な客観的理念性を備えているとドゥルーズは肯定的に述べる。言語学的理念の十全な構造的個性とは、すなわち、「1」連続した音響の流れから徴収される、音

素と呼ばれる微分的諸要素があること、「2」音素を相互的かつ完全に規定する微分的な諸関係（弁別特徴）、「3」この規定によって引き受けられる特異点の価値、「4」これらによって構成される言語活動 [language] というシステムの多様性、「5」要素と諸関係の、現実的ではなく潜在的な無意識の特徴と、現実的に分節化された音に対してそれらが超越的かつ内在的であるというその二重の状態、「6」やまやまな言語 [langues] と同時に、同じ言語内における微分的な諸要素の二重の現実化、あるいは受肉化（分化 [differentiation]）、「7」意味と構造との相補性、発生と構造との相補性という側面である (DR262-263)。これらは、われわれが構造主義の一般の基準として確認したものと同値である。

すなわち、ここでドゥルーズは、潜在的共存としての全体的構造、および現実に対応する下部構造から成る構造概念を、現実的領域の充足理由としての客観的理念性へと結び付けていく。構造内部における微分的諸関係によって十全に規定されているが、いかなる現実的な特性も保持していないという記号界の定義は、理念の要素と関係の潜在的特徴と重なる。さらに、記号的要素とその諸関係は、言語活動の領域における現実的な項と関係へと分化されるということこそ、ここで述べられている発生と構造の相補的關係である。この相補的關係についてはすぐ後で検討を付け加えるが、いずれにせよ、「この意味で、理念は、構造として定義されるのである」(DR237)。

しかし他方でドゥルーズは、この言語学的理念の内部における差異が、経験的な対立関係あるいは否定的関係と混同されることを批

判する。すなわち、音韻論体系には否定的関係しか存在しないと述べる言語学は、それ自体で十全に肯定的な理念を見出しているにもかかわらず、それを自覚していない。言語体系における微分的諸関係を、対立関係として捉えることは、「単なる用語法や慣習の問題ではなく、まさに言語活動の本質や言語学的理念の本質に関わる」(DR264)とドゥルーズは主張する。

それは言語的無意識の理念の超越的な探求であるべきものに、すなわち、言語活動のゼロ点と関連したパロールの最高度の行使であるべきは必ずのものに、またもや現実的な意識と表象の観点を再導入するやり方ではないだろうか。(DR264)

言語学的理念の客観的理念性を肯定し、言語学的理念における差異が単なる対立関係に代替されてしまうことを批判する、このドゥルーズの両義的な姿勢を、われわれはどのように理解すべきだろうか。この両義的な姿勢は、『差異と反復』がそれへと向かう、ひとつの方向性を示している。すなわち、いかにしてこの十全に規定された理念性を思考するのか、一種の超越論的領域である記号の運動性を、いかにしてそれ自体において思考するのかという問題である。『差異と反復』において提示されているあらゆる議論は、この問題に収斂するとわれわれには思われる。とくに、ドゥルーズは、哲学史において、いかに理念の独自性が、良識や常識といった「思考のイマージュ」としての表象の形式によって曲解されてきたのかを示している。そして、理念を「超越論的な段階にまでもたらし、諸問題を所与 [data] としてではなく、それ自身の充足性をもった」(DR206)理念

の対象性において考察するために、諸能力の超越論的行使⁽¹⁾は要請される。

さらに、ドゥルーズの構造主義理解によれば、構造とは、経験的領域における可能的対象の、確定された一覧表などではない。すなわち、構造主義にとって構造が、すでに現実化された結果であるならば、構造はけっして構造主義の最終目標とはなりえない。つまり構造とは、思考する者がその発生の原理を探究するための立脚点に過ぎないのだ。これは、言語活動という水準から構造主義を捉え、言語活動と記号界のあいだに分断線を引くことで、構造主義の運動それ自体が被る変容にはかならない。すなわち、構造主義は、確定したある特定の構造を他の領域に適応する行為でも、ある現実的領域における現実的な諸要素間の関係から特定の構造を抽出する行為でもない。構造主義は、そのつど与えられた領域において結果として発生する構造が内包する、依然として現実化されていない諸要素、諸要素間の関係、変化率からなるシステムに、实在性を与える行為なのである。こうすることで、「われわれは、発生と構造を和解させるうえでいかなる困難も見出すことはなく」(DR237) ことになる。

このような観点からすると、発生の原理あるいは理念とは、経験的領域における「いかにして」「どのくらい」「いつ」「どこで」といった問いから独立に存在するわけではないことになる。なぜなら、発生の原理としての記号界が、全体的構造と下部構造からなる二重の構造を生産する、と同時に、生産の結果である構造が潜在的

共存としての発生の原理の一部を、自らの受肉、現実化という形で表現することによって、理念と構造とのあいだに相補的な関係が確立されるからである。厳密にいえば、ここでは、理念と構造のあいだで、結果としての構造を立脚点としてその発生の原理を思考するものを折り込んだ、複雑なシステムとしての相補的關係が樹立される。「本質は、このような程度、このような仕方、このような決疑論から切り離されてしまえば、いかなるものでもなく、空虚な一般性に過ぎなくなってしまふ」(DR236)。問いは必然的に自らが生じた場としての問題を表現するのである。これこそまさに、先述した発生と構造の相補的關係の内実である。したがって、この相補的關係は、例えば、J・ウィリアムズが(Williams 2003:7-8)で述べるとような、単なる、現実的なものと潜在的なものとのあいだの關係性ではない。それは少なくとも、現実的領域と潜在性としての理念と個体の発生を巻き込んだ、三つ組から成る現実化の過程のあいだで打ち立てられるべき関係である。こうして、ドゥルーズにおける構造主義の再考は、経験におけるその超越論的領域の内在を自覚的に反省することを促し、発生と構造概念を結びつけることで、『差異と反復』における発生の問題へと展開されていると考えられるのだ。

八 ドゥルーズにおける記号論の確立へ向けて

最後に、ドゥルーズの構造主義理解が、ドゥルーズ自身の哲学体

系の解明とは別の目的に向けて開く、もうひとつの可能性を示唆し、それをわれわれの課題として引き受けておこう。

ドゥルーズの構造主義理解によれば、われわれが知覚し、認識し、あらゆる事物に出会う経験的領域は、すべて構造をとまなう言語活動の次元である。そしてそれは言語活動である限りにおいて、理念的全体性を内包した帰結である。すなわち、「現実界と想像界、リアルな存在者とイデオロギー、意味と矛盾は、「過程」から出発して、すなわち、本来構造的な分化する生産から出発して理解されるべき「効果」である」(AS269)。

ならば、経験においては決して現れないその生産原理を、われわれは経験的事象において思考しなければならない。この経験的な思考の絶対的無力さと、その思考可能性という両義性が、ドゥルーズの経験論にはこめられている。それはもはや、可能的な経験の条件を規定することが目的なのではない。それは、現実的な経験において常に働いているにもかかわらず、われわれの表象の形式、すなわち概念の同一性、否定や対立、類似性といったカテゴリーを介して、自らを偽装することによってしか自らを表現しえないものを対象とする。そして、経験的な領域のただなかにおいて、その超越論的条件を思考するために自身の諸能力、諸前提の変容を要求する自らのプログラムを、ドゥルーズは超越論的经验論[empirisme transcendental]と表現する。このような「下位」表象的な領域が有する生きられた実在性」(DR95)を見出すための思考がいかにして可能なのかという問いに『差異と反復』は向けられている。

そして、伝統的な思考様式の批判、解体を踏まえたうえで、その超越論的条件を内包した経験の対象としてわれわれに与えられるあらゆる現象を、ドゥルーズはシーニュ[signe]と呼ぶのである。とくに『差異と反復』においてシーニュは、理念的な多様体と存在論的な強度的多様体との連関、その仲介者として捉えられている。理念も強度も、われわれの現実の発生原理であると同時に、われわれの日常的な経験の対象という意味での現実性をもたないが、それ固有の実在性をそなえた潜在的な多様体を構成している。現象とはこのような「もろもろの齟齬するもの」(コミュニケーションのおかげで、そのシステムの中に閃くものである」(DR286)。

ドゥルーズが『差異と反復』で提示したあらたな超越論的哲学、すなわち超越論的经验論とは、このように、あらゆる事象をシーニュ、徴候[symptôme]と捉え、どのようにそれを解釈し、解読することが可能となるのか、そのための思考を形成するひとつのプログラムである。その意味で、哲学とは一種の記号学[semiotique]であるということが出来る。

本稿では、ドゥルーズの構造主義理解を再考することで、経験と理念が内在的に結びついたドゥルーズの超越論的经验論の一面を考察した。と同時に、われわれは、記号界、意味あるいはシーニュといったドゥルーズの記号学的概念の独自性、およびその内実をよりいっそう明らかにしなければならない。ドゥルーズが用いるさまざまな記号概念は、ドゥルーズ自身の哲学体系を構築するひとつの参照点として機能しているだけでなく、記号論それ自体の発展にとっ

でも、有用な視点を提供するとわれわれは考える。したがって、本稿は、ドゥルーズ独自の記号概念によって構成される一種の記号論へもまた、同時に開かれた、その準備的作業の一端にすぎない。

【註】

(1) ドゥルーズの著作と論文からの引用は以下の略記号、次いで頁数の順に表記した。邦訳があるものに関してはできるだけ参考にしたが、文脈上訳を変更したこと、紙幅の関係から邦訳に関しては頁数の指示を行わなかったことをお断りしておきたい。

DR: *Différence et répétition*, Paris: PUF, 1968.

LS: *Logique du sens*, Paris: Les éditions de minuit, 1969.

AS: "A quoi reconnaît-on le structuralisme?" in *L'île déserte et autres textes: Textes et entretiens 1953-1974*, Lapoujade, David, ed. Paris: Les éditions de minuit, 2002.

Les éditions de minuit, 2002.

(2) 特に目を引くのは、おもに『千のプラトール』といった後期の著作において、構造主義の理論的前提である言語学ないしは記号学が、シニフィアンを特権視する記号の体制として批判される場面であろう。端的に述べるに、『千のプラトール』の言語学批判は、安直なシニフィアンシニフィエ概念に基づく記号学や、線形的な生成文法に向けられている。それらは、言表行為をある一定の主体へと結びつけることによって、本来、言表行為を規定するはずの社会的、集団的構造を覆い隠してしまう。ドゥルーズがそれらを問題視するのは、記号の体制に基づく言語学、言語分析がすぐさまコミュニケーションや言説を媒介として介入する、管理社会の権力に結びつくからである。

(3) この論文は、一九七二年、F・シャトレ編集の『哲学の歴史』に掲載された。当該論文において、執筆時期が一九六七年であることが示唆されている。したがって、この論文は、構造主義を、思想的文脈

の中で歴史的に位置づけるといふよりも、さまざまな領域における当時の構造主義的運動に、いかなる共通の基準を設けることができるのかという問いの体制が採られている。さらに付言しておく、ドゥルーズが構造主義という名で想定している運動は、本稿で扱った人文科学における構造主義に限られない。『差異と反復』で構造主義として提示されているのは、とくに、A・ロトマン、J・ヴィユマンといった発生源―構造を問題とする数学における構造主義である。しかし、発生源と構造を結びつける上で、人文科学における言語学的モデルの特権性の解体は必要な迂回であるとわれわれは考える。多様体としての理念からの、空間的・時間的関係における現実化の議論は (DR236-238) を参照。

(4) スイスの発達心理学者であるJ・ピアジェは、構造主義の一般的特徴として、部分に還元されることのない全体性、構造間の変換規則、自己制御の三つを挙げている。構造を定義するこれら三つの特徴は、それぞれに検討すべき独自の意義を持つが、総じてそれらは、構造の客観的普遍性を形成すると考えられている。(ピアジェ二〇〇三年: 一五頁) 参照。

(5) 小泉義之氏は「何を構造主義として認めるか」(『無人島一九六九―一九七四』、河出書房新社、二〇〇三年所収) において *le symbolique* を「記号界」と訳出している。本文で述べているように、*le symbolique* はラカンの象徴界に由来する概念だが、レヴィ・ストロースならびにR・ヤコブソンという精神分析以外の影響も考慮に入れるならば、それを「記号界」と表記することは適当であると思われる、本稿においても採用させていただいた。

(6) 数学、物理学の観点から、多様体概念の検討を行うことで、M・Delandaは、ドゥルーズの存在論における本質概念の棄却、形態発生源プロセスの重要性を強調している。(Delanda 2002) 第一章を参照。

(7) 構造概念をこのように区分することは、多くの重大な帰結を導くこと

になる。とくに重要なのは、構造概念そのもののなかに、構造の変動、構造間の区別と関連といった、きわめて動的な時間性、ないしは運動性が含まれるということである。現実に対応する局所的な構造と、その変化やすべての関係が共存する全体的構造との区別は、異なるものもろの局所的構造を包摂する「ディスクールによる一般理論」を模索したL・アルチュセールの業績と比較、検討されなければならない。

(佐藤 二〇〇三年)

(8) そもそも「意味とは何か」という問い自体が安易な返答を受け入れない類のものである。というのも、意味を、語の持つ意味作用においてとらえるのか、指示作用においてとらえるのか、あるいはコンテクスト理論や語用論においてとらえるのかによって、まさに意味という語のもつ意味が異なるからである(加藤 二〇〇五年)。むしろ、意味という存在者をどのように位置づけるのかという問いに、『差異と反復』の第三章の後半部、さらに『意味の論理学』の静的発生論は向けられており、各々において微妙に異なる位置づけがなされている。

(9) こうした構造主義的モデルがいかにして現実的な発生を構成するのかという問題は、『意味の論理学』の大きな主題のひとつである。『意味の論理学』は、言語的秩序の発生と、その内部における限界を画定することを通して、「器官なき身体」という概念が見出される重要な著作であり、われわれが、以下の節において検討するのは、その一部分、半身にすぎない。そして、われわれが本論で注目している、構造主義における記号概念、あるいは言語活動と身体性といった問題系から『意味の論理学』全体の議論を再構成することは、ドゥルーズ自身の哲学的展開を測定するためにも、また、彼独自の「記号論」を特徴付けるためにも、重要な意味をもつであろう。これらについては、稿を改めて論じられなければならない。

(10) 小泉義之氏は、デカルトにおける松果線の概念的役割こそ、物体と精神という二つの実体の概念的区別を規定することであると述べている

(二〇〇〇年)。

(11) 『差異と反復』の理念論を、諸能力の超越論的使用という観点から主題的に論じたものとしては、(江川 二〇〇三年)が重要である。

【参考文献】

カラー、ジョナサン、『ソシユール』、川本茂雄訳、岩波現代文庫、二〇〇二年。

Delanda, Manuel. *Intensive Science and Virtual Philosophy*. New York: Continuum, 2002.

江川隆男、『存在と差異—ドゥルーズの超越論的経験論—』、知泉書館、二〇〇三年。

藤田博史、『精神病はいかに解明されるべきか—『現代思想』第十八巻第二号所収、青土社、一九九〇年。

加藤雅人、『意味を生み出す記号システム、情報哲学試論』、世界思想社、二〇〇五年。

小泉義之、『ドゥルーズにおける普遍数学』、『現代思想』第二五巻九号所収、青土社、一九九九年a。

小泉義之、『ドゥルーズにおける意味と表現』、『批評空間』第二期第二三号所収、太田出版、一九九九年b。

小泉義之、『ドゥルーズにおける意味と表現』【?】表面の言葉』、『批評空間』第二期第二五号所収、太田出版、二〇〇〇年。

レイヴィストロース、クロード、『マルセル・モースの業績解題(『社会学と人類学』への序文)』、清水昭俊、菅野盾樹訳、みすず書房、一九七四年。

マルティネ、アンドレ編、『言語学事典』、三宅徳嘉監訳、大修館書店、一九八〇年。

ピアジェ、ジャン、『構造主義』、滝沢武久ほか訳、白水社、二〇〇三年。

佐藤嘉幸、『精神分析理論から構造変動の理論へ—アルチュセールにおける

構造変動と偶然性―』、『思想』第五号所収、岩波書店、二〇〇三年。

鈴木泉、「ドゥルーズ哲学の生成一九四五―一九六九」、『現代思想』、第三十卷十号所収、青土社、二〇〇二年。

Williams, James. *Gilles Deleuze's Difference and Repetition: A Critical Introduction and Guide*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003.

—『*The Transversal Thought of Gilles Deleuze: Encounters and Influences*』. Manchester: Clinamen Press, 2006.

Žižek, Slavoj. *Organs without Bodies*. New York and London: Routledge, 2004.

Reconsidération du Structuralisme chez Deleuze

KOBAYASHI Takuya

Selon ce que Deleuze dit, *Différence et répétition* (1969) a été dans l'air du temps, c'est-à-dire le mouvement que l'on appelé le «structuralisme». Il est clair que des thèmes de *Différence et répétition* et le structuralisme, surtout dérivé de la linguistique saussurien, s'développent autour de la notion *différence*. La relation entre Deleuze et le structuralisme n'est cependant pas bien comprise. Notre article examine cette relation très obscure.

Ainsi, dans un premier temps, il faut préciser comment Deleuze compris le structuralisme. Pour cela nous essayons de analyser "A quoi reconnaît-on le structuralisme?" Car Deleuze y définit des caractères du structuralisme, tels que le langage, le symbolique, la structure total et les sous-structures, et le sens et le non-sens. Ce sont des principes génétiques de la structure en profondeur de la structure statique. Par eux Deleuze veut rejeter le modèle linguistique dans le structuralisme et demande le changement du structuralisme en lui-même. Puis, il semble que son sujet soit renvoyé à *Différence et répétition*. En précisant comment ce point de vue, surtout génétique ou dynamique non statique, est lié au concept *l'idée* dans *Différence et répétition*, nous considérons un certain côté de ce qui est nommé «l'empirisme transcendantal» par Deleuze.

key words : Gilles Deleuze structuralisme symbolique genèse empirisme transcendantal

